（2）ヒアリング調査の結果とその出所

ここでは、ヒアリング調査の結果を整理していきたい。まず、表6は「高等学校へのヒアリング調査」結果を示したものであり、次に、表7は「20・30・40歳代の地域住民へのヒアリング調査」結果を、そして、表8は「50・60・70歳代の地域住民へのヒアリング調査」を示したものである。

表6　岩手県と長崎県における高等学校でのヒアリング調査結果

項目	岩手	長崎
雇用環境	地元での就職の受け皿が少ない。（二戸） 岩手県の教員採用試験は全国的にも倍率が高いようだし、地元で就職したいという学生が多い。（二戸） 近年、県内での就職が厳しい状況になっている。（西根） 就職の受け皿が減っている。（遠野） 女子型の企業が全体的に少ない。（遠野）	長崎市内への就職はほとんどなく、佐世保に働き場所が多く、また福岡へ出て行く学生も多い。（佐々） 女子の就職先では佐世保市内のサービス業・小売業・販売などが多い。（佐々） 女子の医療関係の働き場所が多い。（川棚） 大卒男子の働き場所があまりない、大企業も少ないし、企業誘致もあまり行われてこなかった。（諫早） 男子は地元に働き場所が少ない。（有明） 県外就職した学生で、数年で退職することになった場合、男子は地元に働き場所がないので福岡・大阪などで探すが、女子は地元に戻ってくる学生が多い。（布津）
進学状況	保育士・栄養士・看護師を志望する女子は初めから県内の短大や専門学校を希望する学生が多い。（二戸） 盛岡へ通学する学生もいるが、距離的には盛岡よりも近い県外の八戸へ通学する学生もいる。（二戸） 経済的に県外の大学への進学が厳しいとなったら、盛岡市内の専門学校へ進学する学生が多い。（西根） 専門学校は盛岡市内の学校を希望する学生が多い。（遠野）	女子では、看護・介護・美容関係を希望する学生が増えている。（佐々） 県外でも嬉野・佐賀市内などは通学する範囲内で、通う学生も多い。（川棚） 長崎市内へは通学するが、佐賀・福岡へは通学せず出ていくことになる。（諫早） 諫早市内へは通学するが、長崎市内・佐賀などへは通学できない。（有明）
時代の変化	男女とも、4年生大学への進学者が増加している。（二戸） 進学校でも男女比率に差がなくなってきている。（遠野） 1980年代後半以降、女子学生が、就職にしても進学にしても、県外へ出て行く傾向が	20年くらい前までは就職する学生の方が多かったが、15年くらい前に同じくらいになり、10年くらい前から進学が就職を上回るようになっていて、特に女子の進学希望が増えている。（有明）

	増えている。（遠野） 地元企業の不況などによって、就職から進学へと切り替える学生が出ている。（金ヶ崎） 近年、女子の県外進学（4年制大学）が増加傾向にある。（金ヶ崎）	
Uターン	親の面倒をみるために地元にUターンする人が多い。（遠野） 男子は県外就職を希望するにしても、いずれ岩手に戻ってこれそうな会社（新日鐵などのように岩手に支社がある会社）を希望する学生が多い。（遠野） 女子は、親の面倒をみるのは長男の役目と考えているため、自分が帰ってこなくてはいけないというような意識はない。（遠野）	女子は、福岡の専門学校に進学する場合でも、いずれは地元に戻ってきたいと考えている学生が多い。（佐々） 看護師・栄養士関係で福岡の専門学校へ進学する女子もいるが、就職は地元でと考えている学生が多い。（川棚） 県外の4年制大学へ進学した男子は、地元に戻って就職というのはなかなか難しい。（諫早） 県外の看護系専門学校へ進学した女子は、地元へ戻って就職する学生も多い。（諫早） 男子は地元へ戻ってくることが少ないが、女子は地元に戻ってくることが多く、この10年間で県外進学した女子のうち、半数以上は就職時に県内（島原半島・諫早市・長崎市）に戻ってきている。（布津）
家庭環境	家庭の経済的な理由で、最初から短大志望にする学生が多い。（二戸） 近年、経済的に県外の大学への進学が厳しいという家庭が増えている。（西根） 父親のUターンによって遠野に来たという学生が多い。（遠野） 3世代の家庭や、兄弟姉妹の多い家庭が多い。（遠野）	経済的に厳しい家庭も多く、女子まで外へ進学させられないという家庭が比較的多い。（佐々） 家庭の経済事情で、進学から就職へと切り替える学生もいる。（布津）
学生の意向	地元志向の強い学生が多い。（二戸） 女子は、県外でもいいからどうしても就職したいという強い意思をもつ学生が多いが、男子は、地元で、親元で生活していきたいという意思の強い学生が多い。（西根） 県内就職が厳しいとき、女子はあっさり県外就職へと希望を転換する学生が多いが、男子は県外へと転換する学生が少なく、あくまで地元が良いという学生が多い。（西根）	就職・進学ともに、男子は県内・県外の両方から考えていこうとする傾向にあるが、女子は県内（佐世保近郊）を希望する傾向がみられる。（佐々） 男子は福岡など県外志向も比較的強いが、女子は地元志向が強い。（川棚） 男女ともに進学者は県内志向・県外であれば福岡志向が強い。（諫早） 男女とも、福岡を希望する学生が多く、九州の外へ出ていこうという意識は弱い。（有明）

	長男の学生は地元の専門学校などを希望する場合が多いが、次三男は首都圏などへ就職を希望する学生が多いというような傾向がある。（遠野）	女子は、地元に戻って働くことを希望している学生が多い。（有明） 男子は、地元志向をもっていても、地元での就職が難しいため、県外へと切り替えざるを得なくなる。（布津） 進学にしても就職にしても、県外であれば男女とも福岡を希望する学生が多い。（布津）
親の意向	親が子どもを地元に留めておきたいという場合が多い。（二戸） 長男には、家を継ぐため・お墓を守っていくため・自分たちの面倒をみてもらうため、地元へ戻ってきてほしいと思っているが、次三男や女の子に対しては特にそのような意識がない。（遠野）	女子に対して、地元にいてほしい・地元に戻ってほしいという意向が強い。（佐々） 女子を手元に置いておきたいという意向がとても強い。（川棚） 男子にはお金をかけても学をつけさせ世の中を渡っていけるようにと考えるが、女子にはお金をかけてまで外で学ばせる必要はなく家から通えるところにいけばいいと考える親が多い。（川棚） 女子の中には、成績優秀でも親の意向に沿って地元の大学に進学する子も多い。（川棚） 男子には、大学まで出して地元の小さい会社で働いたとしてもいい生活はできないので、外でいい仕事についてほしいと考えている。（有明） 女子には、地元にいてほしいと考えているので、地元で働くなら4年生大学へいく必要もないから、短大や専門学校で資格をとって地元に戻ってほしい。（有明） 男子には、長男であっても外にでて構わないという親が多く、外の社会で鍛えられてこい、他人の釜の飯を食ってこいという雰囲気。（布津） 女子には、遠くに行ってはダメだという親が多く、他所で結婚されたら困るし、老後に面倒をみてほしいという気持ち。（布津）

ここでは、進学および就職時における「県内」・「県外」割合の男女別動向を把握するため、学生自身の希望や両親の意向などに関する男女別での差異に焦点をあててお話をうかがいながら、進学・就職時の移動に影響を与えてくる家族観などを捉えることを視野に入れたヒアリング調査を実施し、それを整理したのが表6である。以下において、そのヒアリング調査の結果をみていくことにしたい。

それぞれの項目についてみていくと、「雇用環境」については、岩手県では地元での就職の受け皿が減って県内での就職が厳しい状況になっており、長崎県では男子（特に大卒男子）の働き場所が少ないようである。

「進学状況」については、岩手県では短大や専門学校は県内希望が多く、長崎県では佐賀や福岡へ進学する学生も多いという。

「時代の変化」としては、岩手県では就職・進学（4年制大学）ともに女子の県外が増加傾向にあり、長崎県では女子の進学希望が増加傾向になっている。

「Uターン」については、岩手県は女子では少ないが男子は県外就職でも岩手に戻ることを視野に入れているのに対し、長崎県は 4 年制大学へ進学した男子では少ないが女子は県外の専門学校へ進学しても就職は地元へ戻ってくることが多いようである。

「家庭環境」としては、岩手県では経済的に県外への進学が厳しいという家庭が増加傾向にあり、長崎県では経済的に厳しく女子まで県外へ進学させられないという家庭が多い。

「学生の意向」については、岩手県では、男子は特に長男で地元志向が強いが、女子は県内でも県外でも特に構わないという傾向であり、長崎県では、男子は就職・進学とも県内・県外（福岡）の両方から考えていくが、女子は 就職は地元で、進学は県外（福岡）でも就職時は地元を考えている傾向が強いという。

「親の意向」としては、岩手県では、長男には地元に戻ってきてほしいが、次三男や女子には特にそのような意識がないのに対し、長崎県では、男子には長男であっても仕事のためであれば県外でも構わないが、女子にはあくまで地元にいてほしいと要望する親が多いようである。

以上の結果を整理すると、まず、女子の進学希望が増加していること、県外への進学が増加していることなどが特徴的である。また、地元の就業機会が十分に確保されておらず、岩手県と長崎県ともに経済基盤が脆弱であることが示唆されている。

そして、ここで注目しておきたいのは、男女別の移動に関する特徴についてである。すなわち、岩手県では、女子は地元に対して特別なこだわりを抱いてはいないが、男子は地元志向が強く、県外へ就職してもいずれは岩手に戻ることを高校生の時点から視野に入れている。一方、長崎県では、男子は地元で仕事があれば良いが、仕事がなければ県外でも構わないというスタンスがうかがえるのに対し、女子は県外に進学しても就職時には地元へ戻ってくるという傾向がみられる。簡潔にいえば、岩手県の女子と長崎県の男子は地元志向がそれほど強くないが、岩手県の男子と長崎県の女子は地元志向がとても強いといえよう。このような差異が生じている背景には、本人の意識だけでなく、それぞれ親の意向が大きな影響を与えているのではないだろうか。

表7　岩手県と長崎県における若年層・中年層へのヒアリング調査結果

項目	岩手	長崎
結婚・出会い	若い間は結婚への意欲が強いが、年を重ねるにつれて、出会う機会が少なくなっていき、結婚をあきらめてしまう。（二戸・女性） 男性は出会いのイベントに参加しても、自然と女性に話しかけられない人もいたり、コミュニケーションをとることが得意でない人が多い。（遠野市・女性） 出会い事業の会員数で女性が少なく、またイベントなどでも女性の参加者が少ない傾向にある。（遠野市・女性） 農業委員会が主催する出会いのイベントで参加希望を募ると、男性は多く集まるが女性は圧倒的に少ないため、交流パーティーの頻度を増やすことができない。（金ヶ崎・男性） 独身の間は、仕事をしていて経済力もあるし、時間も自由に使えるけれど、それがずっと続くのも寂しいと感じるようになった。（金ヶ崎・女性） 昔は自分で相手を見つけなくても周りから紹介してもらえたし、また親の決めた相手と結婚するのも当たり前だったようだが、今はそういうわけにもいかないし、自分で見つけたいという人が多くなった。（金ヶ崎・女性） 20 代の間は職場関係や友人関係などで男女の出会う機会も多かったが、30 代になると飲み会などそういう機会が急激に少なくなった。（金ヶ崎・女性）	若い間は「結婚」を自分だけのことで考えるが、年を重ねるにつれて、親のことや家のことも含めて考えるようになる。（佐々・女性） 女性は、自宅通勤の環境が整っており、あえて結婚しなくても生きていけるようになっている。（諫早・女性） 若い間は、勢いで結婚するが、30 代になってくると、自分の生活スタイルもできているので、結婚に慎重になる。（有明・女性） 若い年齢で結婚するときはあまり考えないで結婚するが、ある程度の年齢になってくると相手にいろいろな条件を求めるようになってくる。（布津・女性） 大卒で働きだしたらしばらくは結婚したくないだろうし、また仕事と家の往復をしているだけでは出会いの機会もない。（布津・女性）
農家・嫁入り	男性が 30 代後半になってくると、親の介護が必要になる人も出てきて、そういうところへなかなかお嫁さんは来ない。（二戸・女性） 農業の機械化が進み、家庭内でそれほど人手を必要としなくなったことによって、農家の女性が外で働くようになった。（西根・男性）	自営や農業を継いでいる人は、親と同居している人が多い。（有明・男性） 農業後継者で結婚している人は、若いときに結婚した人たちが多い。（布津・女性） 結婚していない人は農業後継者のあととりに多い。（布津・女性） 農家へ嫁に行きたくないと考えている女性は多い。（布津・女性）

	今の 50 代くらいまでは農家へ嫁入りする人が多くいたが、40 代くらいから農家への嫁入りを避けるようになってきた。（西根・男性） 親が、自分が農家へ嫁に来て苦労したから、娘を農家へ嫁がせたくないと思うようになっている。（西根・男性） 親たちは、農家へ娘を嫁にやりたくない、公務員やサラリーマンと結婚させたいと考えている。（遠野・男性） 農家は専業・兼業とも、親が元気なうちはあととりであっても外へ出し、親が衰えてきたりしんどくなってきたら、あととりを戻して継がせる。（金ヶ崎・男性）	
意識・価値観	女性は頻繁に出かけるので情報をもっているが、男性は出不精で情報をもっていない人が多い。（二戸・女性） 生活が豊かになって、女性も働いて一人で生きていけるようになったし、また生活が便利になって、男性もどうしても結婚しなくてはいけないとは考えなくなってきている。（西根・男性） 昭和 57 年に盛岡まで新幹線が開通し、都内まで 3 時間で行けるようになったことで、都心との距離感がかなり縮まった。（遠野・男性） 昔は、忍耐・耐えるということが美徳だったけれど、今は、無理しなくてもいい・我慢しなくていいという雰囲気になっている。（金ヶ崎・女性）	男女雇用機会均等法の影響が大きく、市職員でも女性の採用が増加しているが、中小企業や銀行勤め、事務系の仕事をしている女性は結婚・出産での退職が多く、ワークライフバランスはあまり浸透していない。（諫早・女性） “男尊女卑”の文化が根強く、女性は男性をたてないといけないし、また女性が一人前になって言うことを聞かなくなると困るのでパート勤務を妨害しようとする男性も結構いる。（諫早・女性） 今は男性が家事や子育てを少し手伝うようになっているが、昔は男性は家事や子育てをしなかったのであり、手伝う場合には、近所に見られると恥ずかしいから戸を閉めていた。（有明・男性）
男女の移動	高校卒業時に県外へ出ていく男性は多いが、長男は地元に残ることが多い。（二戸・女性） 男性は、今の若い世代でも、家を継ぐ・親と同居するという意識があるので、まずは地元で働くことを考えるし、あるいは地元から通勤できる範囲の仕事を考えるため、それ以外は選択肢から外れる。（西根・男性） 女性は、“あととり”という責任感がな	“娘は側に置いておけ”と、昔から祖母がよく言っていた。（佐々・女性） 娘を側においておきたいという親が多く、また女性自身も地元で暮らしたいという意識の強い人が多い。（佐々・女性） 親からすると、息子は地元でもしいい仕事があればいいが、男性の働き場所も少ないので、福岡など県外へ出てもかまわない。（佐々・男性） 男性は“あととり”という意識は多少ある

	いから、盛岡や県外へと出て行く。（西根・男性） いったん外に出て地元に戻ってくるのは男性、とくに長男が多い。（遠野・男性） 高校卒業時に県外の大学へ進学したが、大学卒業時の就職にあたっては、長男だから地元で働き場所を探すようにと、親から言われる。（遠野・男性） 若い人は地元から出て行ってしまう傾向が強まっているが、男性だと、あととりとして戻ってくる者もいるが、女性ではあまりいない。（遠野・男性）	が、就職・仕事のため多くが外へ出ていく。（川棚・男性） 病院関係など、地元に女性の働き場所が増えている。（川棚・女性） 県外へ大学進学した男子が、地元で能力を活かせる働き場所は少ない。（諫早・男性） 女性はへたに学力をつけたら地元で仕事がないので、短大などにいって、事務の仕事などについて、結婚してくれるのが良い。（諫早・女性） 男性で高校卒業時の就職に地元へ残るのは、自営・農業・漁業・大工など。（有明・男性） 大学に進学した場合、戻ってきて働けるような企業や職場は少ない。（有明・男性）
家族観・親との同別居	農家でなく、農地がない場合でも、親と同居して親の面倒をみるのが長男の役割。（軽米・男性） 未婚男性の多くは長男で、その場合、家があり、田畑があり、親もいるので、結婚して外へ出るわけにはいかないし、お嫁さんをもらうことを前提として結婚を考えなければならない。（二戸・女性） 40代・50代の未婚者はほとんど親と同居している。（遠野・男性） 長男は家に残るものだ、長男は親の面倒をみていくものだ、などを、小さい頃から、お祭りや行事のたびに、親・家族・親族から言われて育つ。（遠野・男性） 結婚したときは夫の親と別居だったが、夫は長男なのでいずれ同居するわけだから、それなら早い方がいいということで同居した。（金ヶ崎・女性）	長男は家のあととりという意識は少なからずあるが、同居を求められる（同居しなければと考える）のは農家くらい。（佐々・男性） 長男夫婦が地元にいないので、離婚した娘が子どもを連れて実家に戻りやすい。（佐々・女性） 親たちは、自分たち老後の世話や介護を考えて、娘を近くにおきたいという意識が強い。（川棚・女性） 長男の意識・責任というのは、必ずしも親と同居するということではなく、家を継ぐ・家名を継承する・財産や土地やお墓を守っていくということ。（有明・男性） 親は、最後に面倒をみてくれるのは娘だと考えているので、就職時に家に帰ってこなくてもいいから地元の近くにいてほしいと思う。（有明・女性） 女性は、親から、結婚は近くでしてほしいと言われることが多い。（有明・女性）

ここでは、働き方や生活など地域社会全般に関する特徴や時代的推移の中での変化について、また地域に固有の生活様式や価値観（家族観・結婚観）について、市内（町内）出身・在住の20代・30代・40代の自治体職員を対象にお話をうかがった。その結果を整理したものが、表7である。

それぞれの項目についてみていくと、「結婚・出会い」については、岩手県では、30 代になってくると出会う機会が減少し、また出会い事業やイベントで女性の会員・参加者が少ないという指摘もみられた。長崎県では、30 代になると相手に条件を求めたり、親や家のことも考えて、自分の生活スタイルもあるので、結婚に慎重になるという意見がみられた。

「農家・嫁入り」については、岩手県では、50 代までは農家への嫁入りが多かったが、親や本人が農家への嫁入りを避けるようになり、40 代くらいから農家への嫁入りが減少しているようである。また、専業でも兼業でも農業をしている家は、親が衰えてきたらあととりを戻すという慣行は比較的続いているという。長崎県でも、農家へ嫁に行きたくない女性は増えているようである。また、農業後継者の男性は、結婚している人は若いときの結婚で、そうでない場合は 30 代になっても未婚の人が多いという。

「意識・価値観」としては、岩手県では、1982 年に盛岡まで新幹線が開通し、都心との距離感がかなり縮まったが、その一方で、就業機会の拡大やコンビニの普及で、男女ともに結婚の必要性が薄れているのではないかという指摘もみられた。一方、長崎県では、女性の就業機会は拡大しているが、結婚・出産での退職は依然として多いようであり、その背景には男尊女卑の文化が根強く、家事や子育ては女性がするという意識の強いことが影響しているのではないかという意見がみられた。

「男女の移動」としては、岩手県では、高校卒業時に県外へ進学・就職する人は多いが、あととりの長男は戻る人も多いようである。そして、女性にあととり意識はないが、男性は今もあととり意識が強く、親からも言われるので、地元で働く場所を探す傾向が強いという。一方、長崎県では、高校卒業時に県外へ進学・就職する人は多いが、女性は地元で就職する人も多いようである。そして、男性はあととり意識はあるが仕事の関係で他所へ出てしまい、女性は親からも言われるし、本人も地元で働こうとする傾向が強いという。

「家族観・親との同別居」については、岩手県では、農家でなくとも長男としての意識や責任を子どもの頃から言われて育つようであり、その結果、未婚男性の長男は家・田畑・親があると、嫁を貰うことが前提の結婚にならざるを得ない。一方、長崎県では、あととりとして長男の同居を求められるのは農家くらいであり、親は、老後の世話や介護を考えて、娘に近くにいてほしいという意識が強くなっている。

以上の結果を整理すると、まず、女性が農家への嫁入りを避ける傾向になってきたというのは、岩手県と長崎県ともに共通する傾向である。しかし、農家の男性にとっては、長崎県では農家で食べていくことが難しくなると長男であっても他所へ出していく傾向が強いのに対し、岩手県では農家で食べていくことが難しくなったり、兼業農家であっても、長男を家へ呼び戻すという傾向が未だに比較的みられるという。これは、農地を継承していくということだけでなく、家を継承していく、農家の長男として家のことを引き継ぎ、親の世話・扶養を担っていくという役割も期待されているからではないだろうか。「未婚男性の長男は家・田畑・親があると、嫁を貰うことが前提の結婚になる」ということが象徴的である。それに対して、長崎県では、親の老後の世話や扶養を期待されているのは女性であり、それを親から直接言われる機会も多いため、女性が地元で就職することにつながっているといえよう。岩手県の場合、あととり意識が強く、親からも期待され、地元で働く場所を探すのが男性であることとは対照的な特徴である。そして、このような家族観に基づく男女の行動パターンが、人口性比のアンバランスをもたらしている部分があるの

ではないだろうか。

表8　岩手県と長崎県における高年層へのヒアリング調査結果

項目	岩手	長崎
結婚・出会い	農家や商店の男性や、あととりである長男や長女に未婚の人が多い。（軽米・男性） 40代・50代の未婚男性が多いが、長男で親と同居していたり、仕事が安定していなかったり、だが性格は普通でいい人が多い。（軽米・女性） ブロイラーの加工工場に外国人女性労働者が増えており、中国人やフィリピ人ンのお嫁さんを貰った人もいる。（軽米・女性） 地域の中に40代・50代の未婚男性が多いが、60代は世話して貰って結婚している人が多い。（二戸・男性） 地域の中に、30代・40代の未婚男性が多いが、ほとんどが親と同居している。（西根・女性） “婚活”などあるようだが、この辺りでは、お金をかけてそんなことをしようという人はいない。（西根・女性） 近隣に、結婚していない男性は結構いるが、独身の女性はあまりいない。（遠野・男性） 地域の中に40代・50代で結婚していない男性が多くなっているが、稲作の専業農家のあととりに多く、酪農などはお嫁さんを貰っていることが多い。（金ヶ崎・60代男性）	長男はお嫁さんを貰って他所で暮らしていて、長女が地元で親と暮らしながら未婚であるという家庭が多い。（佐々・女性） 昔は、結婚して子どもをもつというのが当たり前だったが、最近はそうでもなくなってきた。（有明・女性） 女性の給与水準がだいぶ上がってきて、結婚への意味合いが薄れている。（有明・女性） かつては親に見合いをさせられたり、親にいわれた結婚をする人が多かった。（布津・男性） 昔は未婚で家にいると“イキオクレ”と尻を叩かれたものだが、最近は未婚で家にいても居心地がよくなっている。（布津・女性） 農業後継者で結婚した人は、若いときの結婚が多い。（布津・男性） 未婚でいる人は、男性では農家のあととりや、女性では看護師などが多い。（布津・男性）
仲人・結婚の世話	以前は農業委員会が出会い支援を行っていたが、1990年代半ば頃から実績がみられなくなり、2009年に廃止となった。（軽米・男性） 1980年代半ば頃まで仲人が主に長男の結婚の世話をしていたが、世話好きの人がいなくなってしまった。（二戸・男性） 1970年代～80年代には、近所のおばさんが見合いの話をよくもってきてくれたが、20年くらい前からいなくなった。（西根・	かつては世話焼きおばさんがいて、見合いや結婚を世話してくれたものだった。（有明・男性） 昔は、世話人がとりもってくれたら、その相手と結婚するのが当たり前だった。（有明・女性） かつてとは違い、今の結婚には仲人がいないことが多いが、それが離婚の増加にもつながっているのではないか。（布津・女性）

	女性） かつては、年頃の若者で独身の者がいると地域の中で結婚相手を世話したりしたが、最近では、結婚の話をすると嫌がられるようになった。（西根・女性） おとなしくて真面目な男性ほど結婚相手を見つけにくい。（遠野・男性） 昔は、兄弟姉妹が嫁いでいる関係などで縁談がまとまることも多く、自分で結婚相手を決めるというよりも、周りがとりもって結婚する方が多かった。（遠野・男性） 昔は、行商の人が仲人の役割をしたり、地域の中で仲人を商売にしている人もいたが、10 年くらい前からいなくなってしまった。（遠野・女性） 昔は、世話好きのおばさんなどが仲人をやっていて、農家のあととりの結婚を世話していた。（金ヶ崎・女性） 数年前まで結婚相談員がいたが、実績がでないということでなくなった。（金ヶ崎・男性）	世話焼きおばさんがいて結婚をとりもってくれていたが、それも今の 50 代くらいの人までで、40 代の人の頃は少なくなってきて、30 代の人の頃はいなくなってしまった。（布津・女性）
青年会・若者の暮らし	1960～80 年代は青年会が盛んで、男女が出会い結婚することも多かった。（軽米・男性） 青年部の活動が盛んだった頃は、そこで若い男女の交流が行われていた。（二戸・男性） 1970 年代頃までは青年団・青年会の活動が盛んで、若者同士が飲食する機会も多く、男女が知り合う場となっていた。（西根・女性） 青年会で演芸などをしたりして若い男女の交流する機会があり、その中から結婚する人もいた。（遠野・男性） 1950 年代から 1970 年代頃まで青年会の活動が盛んで、男女の交流も行われ、結婚する人も多かった。（遠野・男性）	若者の男性は、シャイ・優しい・弱い・女々しい・内気、若者の女性は、主体的・積極的・横のつながりをもっているという印象。（佐々・男性） 10 年くらい前までは青年団の活動が盛んだったが、今では、地域の中で若い男女が交流する機会や出会いもない。（布津・男性）
出稼ぎ・労働	今の 60～70 代くらいの人たちは、北海道などの出稼ぎ先からお嫁さんを連れてきた。（軽米・男性）	出稼ぎはなく、1950 年代に炭鉱が最盛期を迎え、農業の副業として働く人も多かったが、1960 年代終わりになると、佐世

	1970年代から80年代にかけて盛んで、東京や北海道などの土木関係や遠洋漁業に行く者もいたが、1990年頃から減少してきた。（軽米・男性） 昔は、学校で、出稼ぎ中の父親へ手紙を書く時間があった。（軽米・女性） かつては林業や炭焼きが盛んだったが、林業は1960年代頃から、炭焼きは1970年代頃からなくなってしまった。（軽米・男性） かつての女性は農業をしたり、八戸の水産加工工場へバスで通ったりしていたが、今は福祉施設で働いたり、あとは子育てを終えた世代がブロイラーの加工工場やスーパーで働いている。（軽米・男性） 1980年代までは、遠洋漁業や関東地方への大工仕事など出稼ぎが結構あったが、バブル以降はなくなってしまい、地元に仕事もあまりないので、男性に経済力・生活力がなくなってしまった。（二戸・男性） 今の50代くらいの人までは出稼ぎへよく出ていたが、40代くらいの人から減っている。（西根・男性） かつては、出稼ぎ先で女性と知り合い、嫁さんとして連れてくる人が多かった。（西根・女性） 出稼ぎは関東の工場や静岡の蜜柑畑などに行ったが、出稼ぎ先から嫁さんを連れて帰る人もいた。（遠野・男性） 1970年代から1980年代にかけても、炭焼きや木材など営林署関係の山の仕事が結構あったので男性の働き場はそれなりに多かったが、女性の働き場はあまり多くなかった。（遠野・女性） 昭和30年代頃から出稼ぎへ行くようになり、親が元気で農業をやれる間は、若い者が、夏は北海道へ草刈り、冬は関東の工場や静岡の蜜柑畑、また都内でお寺の墓地をつくる出稼ぎなどによく行った。（遠野・男性）	保の造船所へ働きに行くようになり、専業農家になる人もいた。（佐々・男性） 縫織維関係など女性の働き場所は比較的多くあった。（佐々・女性） 1980年代に焼き物や陶器関係の仕事が最盛期を迎えたが、今でも通勤用のバスがでており、女性の働く場所はある。（川棚・男性） 戦時中から大規模な医療センターがあり、現在も国立病院として立地しており、多くの女性が働いている。（川棚・女性） 1970年代はナイロンやのりや靴下関係の工場が盛んだったし、それ以降も下着メーカーや背広の下請け工場などがあり、女性の働き場所はある程度あった。（有明・女性）

農家・嫁入り	今の40代あたりから農家への嫁入りを避けたがるようになってきた。(軽米・男性) 1980年代頃までは町内に嫁ぐことが多かったが、バブル崩壊後から他所へ嫁ぐ人が増えた。(軽米・女性) 50代・60代の女性たちは、自分が農家へ嫁いで苦労したので、自分の娘には農家でなく、会社員などと結婚してほしいと思うようになっている。(西根・女性) 昔は食べるのに苦労する時代だったから、田畑のある(生活が保障される)農家に嫁に行きたい人が多かった。(遠野・男性) 今は農家だけでは食べていけなくなってしまい、農家の男は、結婚したいとか、家族を養うとか言えなくなってしまった。(遠野・男性) 昔は農家を手伝うくらいでも食べていけたのに、最近は農業で生活できなくなってきた。(遠野・男性) 戦後の貧しい頃は農家でも十分食べていけたが、高度経済成長などでサラリーマンが増えて国民所得が上がってくると、農家の価値が下がってしまった。(金ヶ崎・男性)	この辺りは、土地的に大規模な農業をすることは難しいので、専業農家は少なく、他の仕事をしながら副業で農業をする人が多い。(佐々・男性) 農家では土地や田畑を継承していくという意識があるが、街の中心部はもともと戦時中の軍の土地や家屋だった場所なので、継承していくという意識はあまりない。(川棚・男性) 漁業のあととりは既婚が多いが、農家のあととりは社交的でないからか、未婚が比較的多い。(有明・男性) 女性が家の農業を手伝わなくなってきたし、親も娘を農家へ嫁にやりたくないと思うようになっている。(有明・男性) 専業農家では女の子があととりとなって、お婿さんを貰っている家庭が今も比較的多い。(有明・男性) かつては農家で食べていけたので長男に農家をやらせたが、今は厳しくなってきたので、あととりでも農業をやらせず、勤めにでる。(布津・男性) 農家へ嫁に行きたくない、行かせたくないという人が増えている。(布津・女性)
意識・価値観・時代の変化	高度経済成長期に次三男や女子は都会へ出て行き長男は専業農家として残っていたが、1980年代頃に高速道路が整備されたことなどによって、二戸や八戸に通勤しながら休日に兼業農家となる人が増えてきた。(軽米・男性) 軽米高校では、若者を地元に残していくため、2000年代に入ってから中高一貫教育を行っている。(軽米・女性) 昔は、結婚しなければならないという意識が強かった。(二戸・男性) 男女共同参画社会が広まって、女性の意識がだいぶ変わってきている。(西根・女性) 1970年の岩手国体に合わせて道路の舗装が進み、交通の便が良くなった。(遠野・男性)	昔は、辛くても我慢して耐えて生活したものだが、最近は、耐えることが美徳ではなくなった。(佐々・女性) 高度経済成長期の頃から他所へ出ていく人が多くなったものの、あととりである長男は地元に残っている人が多かったが、今の40代くらいの人から、あととりでも他所へ出ていくようになってしまった。(有明・男性) 今の60代くらいの女性は、専業主婦になる人が多かった。(布津・女性) 昔は、女性が働きにでるのはみっともないという意識で、女性は家庭を守るものだと考えられていた。(布津・男性) “男尊女卑”が強く、夫が台所に入ると嫁がおこられるので、男性は家事をしな

	地域の中で人との関わりが少なくなり、干渉されたくないという意識の強まりなど、20 年くらい前から生活スタイルや価値観が変化してきた。(金ヶ崎・男性) 女性は外へ働きに出て経済力をもつようになり、男性も食事など手軽に済ませられるようになったので、結婚しなくても困らない社会になっている。(金ヶ崎・女性)	かったが、共働きをするようになると家事を少し手伝うようになる。(布津・男性)
男女の移動	長男は一度外へ出ていても、いずれは親が引っ張ってでも地元へ戻す。(軽米・男性) 長男は、田畑もあるし、家を継ぐため、そして親の面倒をみていくので、地元に残る。(軽米・男性) 昔は女性は家庭の経済的理由から教育を受けさせて貰えなかったが、今は県外の大学まで進学する女性も増え、そのまま地元に戻らず外で結婚するようになっている。(軽米・女性) 男性はあととりだと、親がいるし、家があるから外へは出られないが、女性はあととりではないから、気軽に外へ出てしまう。(西根・女性) 盛岡で働く場合に、女性だと出ていってしまう人が多いが、男性だと地元から通勤する人が多い。(西根・女性) あととりでも仕事の都合などで外へ出ている人もいるが、あととりとしての意識から地元に残る人も多い。(遠野・男性) U ターンを希望しているが、働き場所がないということで戻って来られない人もいる。(金ヶ崎・男性) 最近は長男でもいったん外へ出る人が増えているが、あととりということで U ターンする人も多い。(金ヶ崎・男性)	県外の大学へ進学した男子が地元に戻って就職するとしたら銀行員・公務員・教員くらいしかない。(川棚・男性) 男性は仕事のために外へ出て、自分で切り開いていくが、女性は親の近くにいたいと考えるので、U ターンする人も結構いる。(川棚・女性) U ターンした女性は、福祉・看護や縫製工場などで働いているが、男性は U ターンしても働く場所があまりない。(有明・女性) 男性は一度他所へ出たら、戻ってくる人は少ない。(布津・男性) 充実している働き場所は医療・福祉関係くらいで、男性などは地元にいたくても仕事がない。(布津・男性) 男性は、地元に仕事場がないので、進学・就職時に他所へ出てしまうことが多く、地元に残るのは自営業や農家のあととりなど。(布津・男性) 男性には、一生の仕事をさせるなら県外へ行かせるしかないが、女性は、働くのも嫁に行くまでのことなので、そんなに稼がなくてもいいので、女性は地元に残る人が多い。(布津・女性)
家族観・親との同別居	“あととりは長男”という意識は今もなくなっておらず、だがそれは農業や家業を継ぐというよりも、あととりとして家のことをやっていくということ。(軽米・男性) 昔は、長男は“オメエ長男だからこの家に居なきゃなんない”ということで地元に残	“男の子は役に立たん”“女の子が役に立つ”と昔から言われている。(佐々・女性) 子どもの中で誰か一人家を継いでほしいが、長男でも次男でも三男でもいい、長男に特別なこだわりはない。(佐々・男

	し、学校には行かせないが財産を残し、女子には教育を受けさせられず、農業をしながら地元へ嫁いでいき、次三男はお金をかけてでも教育を受けさせ上の学校へ行かせたが、財産はやらない。（軽米・女性） 長男は家に残して財産を相続させ、次三男には相続放棄をさせるが、学をつけさせてやるから自分で生活していけということ。（二戸・男性） 昔は、田畑をもっている（生活の基盤がある）長男の方が結婚相手として好まれ、次三男との結婚は生活が不安だといって、親が心配したり、結婚話をやめさせてしまうこともあった。（二戸・男性） あととりである長男は、家を継ぐのが当たり前だといって育てられた。（二戸・男性） 長男は今も昔も特別な存在で、子どもの頃から長男としての自覚・責任感を植え付けられる。（西根・男性） 今の若い人でも、長男は、親の面倒をみていく・家を継いでいくという意識が強い。（西根・女性） 長男が跡を継ぐ・家を継ぐという意識は、子どもの頃から植え付けられており、今の若い人も長男としての意識は強い。（遠野・男性） 長男はあととりとしての意識があるから、地元に残り、親と同居する人が多い。（遠野・男性） 今の40代・50代は、長男は家に残る（残らないといけない）という意識がとても強い。（金ヶ崎・男性） 長男がいない場合には、長女が婿をとって跡を継がなくてはいけないとたたきこまれた。（金ヶ崎・女性） かつては長男だと親と同居することが当たり前だったが、ここ10年くらいは町内に別の家を建てて暮らすという人もいる。（金ヶ崎・男性）	性） 親は娘のことを心配するので、あまり他所へ出したがらず、側に置いておきたいと希望する。（川棚・女性） 親は、自分たちの介護や世話のことを考えるので、娘を近くにおきたいという意識が強くなる。（川棚・女性） かつては、あととりである長男は結婚後も家で親と同居していることが多かったが、20～30年くらい前から変化し、あととりは離れてくらしても良いが、娘には近くにいてほしいと考えるようになった。（川棚・男性） 長男は、家を継いでいく意識はあるが、就職や仕事の関係で外へ出ていく人が多い。（川棚・男性） 親は、娘を近くにおいておきたいという意識がある。（有明・女性） 女の子は母親との絆がとても強い。（布津・女性） 子どもが少なくなると親の意識も変わるので、子どもが多いときは自立させようとするが、少なくなると、娘にはいい人がいなかったら嫁にいかんでもいいよということになる。（布津・女性） 昔は、あととりと同居することが普通なので、嫁さんを貰ったら小姑になる娘は早く嫁にだしたがるが、今はあととりでも別居することが多いので、娘に家にいてもいいよということになる。（布津・女性） 男の子には、外の釜の飯を食わせた方がいいと考える親が多いが、女の子に対しては、結婚するまで収入少なくても家にいれば困らないから同居していればいいと考える親が多い。（布津・男性）

ここでは、地域社会の特徴や変化について比較的把握されていると思われる60歳代・70歳代の民生委員・地区センター長・一般住民の方々を対象に、働き方や生活など地域社会全般に関する特徴や時代的推移の中での変化について、また地域に固有の生活様式や価値観（家族観・結婚観）について、お話をうかがった。その結果を整理したものが、表８である。

それぞれの項目についてみていくと、「結婚・出会い」については、岩手県では、農家や商店のあととりである長男が、未婚で親と同居している家庭が多いようであるが、長崎県では、未婚女性が親と暮らすという家庭が多いが、かつてと異なり居心地も良いとのことである。

「仲人・結婚の世話」については、岩手県では、かつては周りがとりもつ結婚の方が多く、世話好きの人が主に長男や農家のあととりの結婚を世話していたが、1990 年代に入りなくなってしまったといい、長崎県でも、かつては世話好きの人が結婚をとりもつことが多かったが、それも今の50代くらいの人までで、40代の人の頃は少なくなってしまったという。

「青年会・若者の暮らし」としては、岩手県では、1970 年代頃までは青年会の活動が盛んで、男女の交流も活発に行われ、結婚する人も多かったようであり、長崎県でも、昔は青年団の活動が盛んで、地域の中で若い男女の交流する機会や出会いがあったようである。

「出稼ぎ・労働」としては、岩手県では、1960 年代から出稼ぎに行くようになり、1970年代から1980年代にかけて盛んだったが、1990年頃からなくなり、男性の経済力・生活力がなくなってきてしまった。また、今の60代・70代の人たちは、出稼ぎ先からお嫁さんを連れて帰る人もいたという。一方、長崎県では、出稼ぎはなく、1950年代から1960年代にかけては炭鉱が最盛期を迎えた。また、繊維関係、焼き物や陶器関係、靴下や背広の下請け工場など、女性の働き場所は比較的充実していたという。

「農家・嫁入り」については、岩手県では、戦後は田畑があり生活が保障される農家へ嫁ぎたい人が多かったが、高度経済成長を経て、農家の価値が下がってしまった。また、今の40代あたりから農家への嫁入りを避けたがるようになってきたようである。一方、長崎県では、かつては農家で食べていけたが今は厳しくなってきたので、あととりでも農業をやらせず、他所へ勤めに出るようになった。また、土地的に大規模な農業をすることが難しいので専業農家は少ないが、農家へ嫁にいきたくないという人は増えているようである。

「意識・価値観・時代の変化」としては、岩手県では、男女共同参画社会が広まり、女性の意識が変わってきて、1990 年頃から生活スタイルや価値観が変化しているとのことであり、長崎県では、男尊女卑が強く、男性が家事をすることや女性が働きにでることはみっともないと考えられていたという。

「男女の移動」については、岩手県では、男性は家・田畑・親のため地元に残る人も多く、他所へ出た場合もあととりということでＵターンする人も多いが、女性は昔は経済的に進学できなかったが今は県外へ進学し、あととりではないのでそのまま戻らない人が多いようである。一方、長崎県では、男性は地元に働き場があまりなく、進学・就職時に他所へ出てしまい、そのまま戻らない人が多いが、女性は働くのも結婚までのことなので、それほど稼ぐ必要はなく、地元で親と暮らすためＵターンする人も多いようである。

「家族観・親との同別居」については、岩手県では、昔は長男は学校へは行かせないが

財産を残し、次三男はお金をかけてでも教育を受けさせるが財産は残さず、女の子には教育を受けさせられなかった。また、親にとって長男は今も昔も特別な存在であり、長男はあととりとして家を継ぎ、親と同居して親の面倒をみていくものだという意識がとても強いという。一方、長崎県では、“男の子は役に立たん”“女の子が役に立つ”と昔から言われており、親も長男に特別なこだわりはないので、長男でも就職や仕事の関係で他所へ出ていたり、別居していることが多い。したがって、女の子は家にいればいいということになりやすく、また親は自分たちの介護や世話のことを考えるので、娘を近くにおいておきたいという意識がとても強いという。

以上の結果を整理すると、まず、岩手県と長崎県ともに、仲人や世話好きの人が結婚をとりもつことが少なくなってきたことや、青年会の活動が衰微して男女が交流する機会が少なくなってきたことが、未婚化・晩婚化の進展に影響を与えているといえよう。

また、農業という観点からみると、かつては田畑のある農家が嫁ぎ先としても好まれたが、高度経済成長を経て農家の価値が下がり、岩手県と長崎県ともに農家への嫁入りを避けたがる傾向が強まっているという。そのような状況もあり、岩手県では農家や商店のあととりである長男が未婚で親と同居している家庭が多いが、長崎県では未婚女性が親と暮らすという家庭が多く、かつてと異なり居心地も良くなっているという指摘がみられた。これは、長崎県の場合、農業をやらずに他所で就職・結婚した長男が実家にいないという家族環境が、岩手県と比べて多くなっているからではないだろうか。

そして、岩手県では、昔の女性は経済的に進学できなかったが、今は県外へ進学し、あととりではないのでそのまま戻らない人が多いということ、さらに、男性は県外へ進学・就職してもあととりということで地元に戻る人が女子よりも多いということが、岩手県における人口性比に影響をもたらしている要因ではないかと考える。一方、長崎県では、男性の働き場所が比較的少ないため、男性が県外へ進学したまま戻らない人が多いということ、さらに、女性は働くのも結婚までのことで、それほど稼ぐ必要はないという人が比較的多いので、親と暮らすため地元に戻ったり、親からの意向もあり、地元で暮らすという人の多いことが、長崎県における人口性比に影響をもたらしている要因ではないかと考えられる。

6. ヒアリング調査から得られた知見と既存の資料との照合

（1）ヒアリング調査から得られた知見

ここまで、「高等学校へのヒアリング調査」結果、「20・30・40歳代の地域住民へのヒアリング調査」結果、「50・60・70 歳代の地域住民へのヒアリング調査」結果について、岩手県と長崎県の比較という視点から、それぞれの項目について記述し、その特徴を述べてきた。それを踏まえて、ここで明らかになった知見を整理しておきたい。

まず、岩手県では男女とも、それぞれ注目すべき変化が示されていた。すなわち、岩手県の女子においては、かつては経済的理由などで進学させることが難しい家庭が多かったが、高度経済成長以降、進学傾向が増加し、高学歴化の進展とともに地元からの流出傾向が強まっている。これは、人口性比の動向にも大きな影響を与えたものと思われる。一方、岩手県の男子においては、かつては仲人や世話好きの人の仲介により結婚をとりもっても

らうことが多かったが、1980 年代以降、仲介機能が衰退し、近年では農家忌避志向の進展も重なって、親と同居する長男や農家のあととりなどにおいて未婚者が増加してきている。

次に、岩手県と長崎県を比較してみると、特に注目すべき点を指摘しておきたい。それは、岩手県と長崎県においてそれぞれ性別で異なる地元志向の強さ、さらに、その背景にある親の意向・希望についてである。岩手県では、男子（長男）に対する親の期待が強く、あととりとして家を継いでいくこと、同居して親の面倒をみていくことが期待されている。その影響もあり、男子（長男）本人の意識も地元志向が強く、高校生であっても将来の U ターンを視野に入れている学生が比較的多く、また 20 代・30 代で結婚を考えるにあたっても親との同居ということが前提になることが多いという。一方、長崎県では、女子に対する親の期待が強く、地元で就職して近くに住んでほしい、介護や看病が必要になったときは世話をすることが期待されている。その影響もあり、女子本人の意識も地元志向が強く、進学時に県内希望が多く、また県外へ進学しても就職時には地元でと考えている女子が比較的多いようである。

以上のように、岩手県と長崎県では、子どもに対してそれぞれ性別で異なる期待が存在していることがうかがえる。このような親の意向・希望、さらに子ども本人の地元志向によって、岩手県で女子人口に対して男子人口の上回る市町村が多く、長崎県で男子人口に対して女子人口の上回る市町村が多いという、人口性比の特徴をもたらしているといえよう。そして、それが結婚市場における人口性比のアンバランスをつくりだし、岩手県で男子未婚率が相対的に高く、長崎県で女子未婚率が高いという、未婚率の動向に大きな影響を与えているのではないだろうか。

（2）岩手県と長崎県の人口移動に関する照合

次に、このヒアリング調査から得られた知見について、既存の資料と照合してみたい。まず、人口性比に影響を与えている人口移動についてである。ここでは、『学校基本調査』を用いて、岩手県と長崎県の高校卒業時における県外就職率の動向と、岩手県と長崎県における県外・県内進学率の動向を確認していくこととする。

表 9 は、1970 年・1980 年・1990 年・2000 年・2009 年での、岩手県と長崎県の高校卒業時における県外就職率を示したものである。これをみると、岩手県と長崎県ともに全国平均よりも県外就職率の割合が高くなっており、また、2000 年は全国的にも県外就職率が低くなっているが、岩手県ではそれが顕著である。しかし、岩手県と長崎県では大きな差異はみられない。

そこで、男女別の動向が把握できる 1990 年・2000 年・2009 年について、男女別の県外就職率を示したものが表 10 である。これをみると、2000 年はさきほどと同様やや特異な傾向ではあるが、それ以外の年次では、岩手県と長崎県を比較すると、女子では大きな差はないものの、男子では長崎県における県外就職率の高さが際立っている。

続いて、男女別の進学率における動向を概観しておきたい。表 11 は 1980 年の岩手県と長崎県における県外・県内進学率の動向、同様に表 12 は 1990 年、表 13 は 2000 年の動向を示したものである。以下、ここから把握できる特徴について考察していきたい。

第一に、女子の進学傾向についてであるが、1980 年までは短大進学が大多数を占めていたが、1990 年時点から大学進学者が増加し、2000 年ではその数が逆転し、短大進学者よりも大学進学者の方が多くなっている。これは岩手県、長崎県ともに同様の推移を示してい

る。このようにみると、女子の大学進学者は1980年代から増加を始め、現在に至っており、女子の高学歴化が顕著であるといえよう。

表9　岩手県と長崎県の高校卒業時における県外就職率　(%)

年次	全国	岩手	長崎
1970	31. 3	54. 4	52. 6
1980	24. 3	42. 3	47. 3
1990	23. 8	40. 7	49. 0
2000	17. 7	25. 1	41. 4
2009	21. 9	43. 3	46. 3

資料：『学校基本調査』

表10　岩手県と長崎県の高校卒業時における男女別の県外就職率　(%)

年次	全国－男	全国－女	岩手－男	岩手－女	長崎－男	長崎－女
1990	27. 6	20. 2	41. 1	40. 3	54. 7	43. 7
2000	19. 6	15. 3	24. 7	25. 6	44. 8	36. 8
2009	25. 3	16. 9	47. 9	37. 0	53. 0	36. 9

資料：『学校基本調査』

表11　岩手県と長崎県における県外・県内進学率の動向－1980年　(人, %)

項目	岩手－男子		岩手－女子		長崎－男子		長崎－女子	
大学進学者数	2863		875		4044		799	
進学先大学の所在地	東京	35. 9%	東京	29. 7%	福岡	31. 4%	長崎	30. 0%
	岩手	17. 4%	宮城	24. 9%	東京	18. 2%	福岡	22. 5%
	宮城	16. 3%	岩手	23. 7%	長崎	17. 7%	東京	17. 0%
	神奈川	6. 6%	神奈川	5. 1%	熊本	4. 9%	佐賀	4. 6%
	埼玉	3. 5%	青森	4. 9%	佐賀	3. 1%	熊本	4. 1%
短大進学者数	167		1435		249		2565	
進学先短大の所在地	岩手	24. 6%	岩手	30. 7%	長崎	46. 6%	長崎	52. 7%
	東京	24. 6%	東京	20. 1%	福岡	13. 7%	福岡	22. 8%
	北海道	15. 0%	宮城	16. 7%	東京	8. 8%	佐賀	6. 0%
	宮城	9. 0%	青森	4. 6%	千葉	4. 8%	愛知	4. 4%
	神奈川	4. 2%	福島	3. 8%	大阪	3. 2%	東京	2. 8%

資料：『学校基本調査』

表 12　岩手県と長崎県における県外・県内進学率の動向－1990 年　（人，%）

項目	岩手－男子		岩手－女子		長崎－男子		長崎－女子	
大学進学者数	2455		1161		4052		1535	
進学先大学の所在地	岩手	21．8%	岩手	30．0%	福岡	29．0%	長崎	25．3%
	宮城	19．2%	宮城	19．8%	長崎	15．5%	福岡	19．5%
	東京	19．2%	東京	16．7%	東京	11．3%	東京	7．9%
	北海道	6．6%	神奈川	5．9%	熊本	6．1%	熊本	6．3%
	神奈川	5．8%	北海道	5．6%	佐賀	3．9%	佐賀	4．9%
短大進学者数	192		1485		237		2841	
進学先短大の所在地	北海道	29．2%	岩手	33．1%	長崎	55．7%	長崎	56．6%
	岩手	28．1%	宮城	17．3%	福岡	19．0%	福岡	23．6%
	東京	12．0%	東京	12．0%	東京	5．1%	佐賀	4．5%
	青森	7．8%	青森	6．9%	佐賀	4．6%	愛知	2．2%
	宮城	4．2%	北海道	5．9%	山口	2．5%	東京	2．1%

資料：『学校基本調査』

表 13　岩手県と長崎県における県外・県内進学率の動向－2000 年　（人，%）

項目	岩手－男子		岩手－女子		長崎－男子		長崎－女子	
大学進学者数	2897		1995		4072		2609	
進学先大学の所在地	岩手	19．2%	岩手	28．3%	福岡	26．7%	長崎	41．5%
	宮城	16．1%	宮城	17．2%	長崎	19．8%	福岡	16．6%
	東京	15．0%	東京	13．5%	東京	9．1%	東京	5．6%
	神奈川	7．1%	埼玉	6．3%	熊本	6．8%	熊本	4．3%
	北海道	6．1%	神奈川	5．3%	神奈川	3．0%	佐賀	3．4%
短大進学者数	131		1012		154		1497	
進学先短大の所在地	岩手	42．7%	岩手	42．5%	長崎	35．7%	長崎	56．3%
	北海道	17．6%	東京	13．9%	福岡	31．8%	福岡	23．4%
	青森	9．2%	宮城	11．5%	佐賀	8．4%	佐賀	5．2%
	東京	6．1%	秋田	5．5%	熊本	7．8%	東京	2．2%
	秋田	5．3%	神奈川	4．0%	大分	2．6%	熊本	1．7%

資料：『学校基本調査』

第二に、岩手の大学進学および短大進学、長崎の大学進学においては、男女ともに東京の占める割合が高かったが、1980年と1990年をみると、そこで大きな減少が起きていることが確認される。すなわち、1980年代に、東京への大学進学、短大進学が大幅に減少傾向に転じたということである。第一の特徴ともあわせて考えると、1980年代という時期が、岩手県と長崎県ともに、進学の場所をめぐって大きな変化が生じた時代であったといえるのではないだろうか。

第三に、男子においては、短大進学者は少数派であり、大学進学者が圧倒的多数を占めており、男子の大学進学者の進学先をみると、岩手県の場合には岩手・宮城・東京、長崎県の場合には長崎・福岡・東京が、主要な進学先となっていることがわかる。そこで、これらの進学先の占める割合・順位がどのように推移してきたのかを確認していくこととする。まず、岩手県についてみると、1980年は東京が多数を占め、岩手と宮城の割合は比較的少ないが、1990年には三地域の割合が均衡化し、そして2000年以降は、岩手が最も高い割合となり、宮城、東京が続くという形になってきている。一方、長崎県についてみると、すべての年次において福岡が多数を占め、東京と長崎については、1980年までは東京の方がやや多く、1990年以降は長崎の方がやや多くなっている。このようにみると、男子においては、岩手県では主要な進学先が東京から岩手へとシフトしてきたのに対し、長崎県では一貫して福岡が主要な進学先となっていることが明らかになった。

第四に、女子においては、前述したように、1980年までは短大進学が大多数を占めていたが、1990年時点から大学進学者が増加し、2000年ではその数が逆転し、短大進学者よりも大学進学者の方が多くなっている。そこで、最も多くの進学者を出しているところに焦点をあてながら、その推移を捉えていくことにしたい。1980年・1990年は短大進学を、2000年は大学進学を取り上げ、割合の高い進学先について取り上げることとした。まず、岩手県についてみると、1980年は岩手が最も多く、東京、宮城と続き、さらに1990年以降は、岩手、宮城、東京の順に多いという傾向が持続している。一方、長崎県についてみると、すべての年次で長崎が最も多く、次いで福岡という順であり、その他の地域はきわめて少数となっている。また、長崎の占める割合がきわめて高くなっていることも特徴的である。このようにみると、女子においては、岩手県では主要な進学先が岩手・宮城・東京の三地域で均衡化しながら推移してきたのに対し、長崎県では長崎と福岡が圧倒的多数を占めており、とくに長崎の割合がきわめて高いということが明らかになった。

以上のように、長崎県男子において県外就職率がきわめて高く、進学先でも県外である福岡県が最も多いこと、また長崎県女子においては県内進学の傾向がとても強くなっており、一方、岩手県男子の主要な進学先は東京から岩手へと徐々にシフトしつつあり、ヒアリング調査の結果から把握された傾向と整合的な部分が多いように思われる。しかし、岩手県男子におけるUターンの動向については既存の資料で検討することが困難であったため、この点に関する検討については今後の課題としたい。